明倫短期大学学会 月例研究会報告

平成26年度明倫短期大学学会月例研究会は，平成26年４月24日の第67回から10月23日の第72回まで計６回が開催された．13年目を迎えた当学会の月例研究会で数えられた総演題数は72回で134となった．（通算回数は前身の明倫短期大学研究会からのカウント）．暦年の演題名等は学会HPを参照されたい．

第67回（通算第150回）：平成26年4月24日（木）
（座長：飛田　滋）

8020と明倫短期大学

河野正司（明倫短期大学学長）

世界に類を見ない早さで，我が国の高齢者が全人口の22％に達して，超高齢化社会に突入したのは2008年・平成20年のことであり，現在世界一の長寿国である．我々誰しもが望むのは健康を保った長寿社会「健康長寿」であり，そのためには自分の歯で咀嚼し，自分の口から食事をとることが最も大切であることが知られている．「80歳で20本の自分の歯を保ち，楽しく食事をしよう」を目標に，口の健康を保持・増進する活動「8020運動」が平成元年（1989年），厚生省（当時）と日本歯科医師会によって開始されている．運動開始当初の8020達成率は７％程度であったが，運動が功を奏していることから現在では25％以上に達している．

急速な超高齢化社会の到来のなかで，摂食や発語といった顎顔面や口腔に関する機能が重要視されるようになり，健康維持に不可欠なものとして社会の中で認知されてきており，その中で本学の携わる領域は大きな使命を担っていると考えられる．

本学の先生方が，それぞれの立場から「8020と健康長寿」について考え，研究して，来年あるいは再来年にそれらが実を結び，このテーマのもとに研究発表が行えると良いと考えている．学会を構成する諸君それぞれの活躍を期待している．

第68回（通算第151回）：平成26年5月22日（木）
（座長：木暮ミカ）

インプラントを用いた オーバーデンチャーの新システムについて

飛田　滋（歯科技工士学科）

一般的に歯科用インプラント治療の場合，最終的な歯科補綴処置として欠損顎堤にインプラント体を埋入後，適切なアバットメントを選択しCr&Br形態の上部構造体を装着する方法が採られる．上部構造体の固定方法は主にスクリュー固定とセメント固定の２種類である．欠損領域が広範囲で実質欠損が大きい場合は，ボール型アタッチメントやバー型アタッチメントを固定元とするオーバーデンチャーが用いられてきた．

近年では，ロケーターシステムという新しい発想概念によるオーバーデンチャーが考案された．アバットメント部は円柱状にアンダーカットを呈する形態とし，そこにシリコーンキャップが嵌合する構造を持つ．キャップは７種類あり，各々被覆するアンダーカット量の差違により維持力を正確に調整できる特徴がある．キャップの交換は専用治具により簡便に行える．

また，複数にわたるインプラントの場合，植立状態が最大40°の範囲内であれば着脱が可能であるため臨床的な有用性は高い．

今回はこのシステムを活用した本学附属歯科診療所における下顎両側遊離端欠損の症例を紹介した．

英国博士号への道

廣瀬浩二（歯科衛生士学科）

本発表は，博士号の取得に至るまでの道程について述べたものである．取得したのは教育学博士号（EdD in TESOL and Applied Linguistics）である．英国レスター大学の学生として７年間，EdDプログラムに在籍した．指導教授は，Dr Kevin Armstrongであり，年間２回以上会って直接指導を受けた．Dr Kevin Armstrongは，残念ながら途中，病気になり，Dr Agneta Svalbergが指導教授となった．

博士論文（55,000単語）の提出後に待ちうけているのが，Viva Voce（口頭試験）である．英国でHow to Survive Your Viva：Defending a Thesis in an Oral Examinationという書籍を購入し読んだが，不安は増すばかりであった．不合格者がでる試験である．指導教官のDr Agneta Svalbergが私だけのために，特別に，Mock Viva（模擬試験）を行ってくれた．大学近くの伝統あるホテルで行ったが，緊張は増すばかりであった．

いよいよVivaの時がやってきた．2013年５月８日（水）午後２時ちょうどに始まり，休憩を挟み，